

第 17 回 ライフエンス学術研究大会 一般演題

演題番号：

演題名： 中医鍼灸学研修団を引率して

所属・氏名：中医学研究所研究員・はりきゅうマッサージ治療室室長 渡辺明春

「目的」

毎年夏、後藤学園では東京校・神奈川校の東洋医療総合学科 3 年生の希望者を中心に中医鍼灸学研修団が組まれている。ここでは中医鍼灸学研修団の歴史を踏まえ、昨年は副団長、今年は団長として 2 年連続で研修団を引率した経験から、研修の教育的効果や今後の課題などを報告したい。

「方法」

昨年、本年とお盆休み明けの火曜日から 8 日間、後藤学園中医鍼灸学研修団を引率した。全国に 90 校以上ある鍼灸学校の中でも、とりわけ中国にある中医薬大学と長年の交流を続けているのは後藤学園の強みである。鍼灸発祥の地である「中国医学の現場」を知ることが、鍼灸師を目指す学生のモチベーションアップにも繋がる。

そこでまず 32 回を数える本研修団の歴史を振り返り、その果たしてきた役割を再確認する。続いて、昨年、本年どのような研修が行われたのかを紹介する。最後に 33 回中医鍼灸学研修団へ向けた提案を行いたい。

「結果」

中医鍼灸学研修団は、卒業生や一般鍼灸師を対象として 1982 年に第 1 回が実施された。1986 年から学生中医鍼灸学研修団が同時期に実施され、現在の学生を中心とする形になったのは、1993 年以降である。

開始時は北京中医薬大学との交流だけであったが、1986 年からは天津中医薬大学とも繋がり、国際鍼灸臨床学術会議、実験鍼灸学などへの参加も行われた。

ここ数年は、天津中医薬大学での臨床カンファレンス、同第一付属医院での見学、北京中医薬大学での美容鍼灸レクチャー、東直門病院での見学を中心に研修が行われている。

「考察」

今年度は、現地で必要な情報などを中心に、事前学習会を東京校と神奈川校で 90 分授業を 2 コマ実施した。これによりトラブル回避、質問力向上が図れたと思われる。

今回の反省として、北京の東直門病院病棟での学びに温度差がみられたことである。この点を改善するために、来年度は病院関係者に私たちが学びたいこと、知りたいことをはっきりと伝えていくことが大切だと感じている。さらに北京の鍼灸外来で使われている「董氏奇穴」「腹鍼」などを、事前に日本において初歩的に学んでおくことが、現地の短い見学時間を意義深くすると思われる。

キーワード：中医鍼灸学研修団、北京中医薬大学、天津中医薬大学